

戊辰戦争で敗れ、辛酸の日々を過ごしながら子孫の育成に力を注いだ会津藩士の魂を引き継ぎ、東日本大震災で被災した青少年への学業支援に乗り出した「海の会」。白虎隊士の孫が中心

となったこのプロジェクトで、大学進学を目指す高校生2人への支援がどのほど決まった。模索しながらの事業スタートだが、支援の動きは少しずつ広がりは始めている。(十種靖人)

高校生2人を支援

会津藩士の魂継承

「海の会」育成事業

「海の会」は福島県会津若松市の飯盛山で自刃を遂げたが果たせず、ただ一人生き残った人物、飯沼貞吉(後に貞雄と改名)の孫、飯沼一元さん(68)の呼びかけで設立。事業は会津の藩校・日新館の「ならぬこと

はならぬ」という文武両道の教えを守って、戊辰戦争後に下北半島の斗南(現青森県むつ市)などに流された若者たちに勉学の機会を与え続けた会津士魂を受け継いだもので、東日本大震災の被災者へ学費などを支給し、返済は求めないという。

事業には8月末までの1次募集に7人が応募。書類審査や面接などから、自分の将来を切り開いていく強い意志、被災状況、就学困難度などを検討した結果、2人への支援が内定した。1人は父親を津波で亡くした仙台市内の高校3年生。起業の夢を抱いているが、働き手が母親1人となったため一時は大学進学をあきらめていた。もう1人は福島第1原発近くの町に住んでいた高校2年生で、原発事故の影響で地方公務員の父、看護師の母と離れ、現在は東京都内の学校に通っている。英語教師になるのが目標という。

認定NPO法人目標

海の会は2人に対し、目指す大学に入学した後に月々10万円を給付するとしている。さらに大学合格までのアドバイスや精神的な悩みの解決など、側面的な支援も行っている。9月末で締め切った2次募集には3人が応募、11月中旬に結論を出す予定だ。さらに年末締め切りで3次募集も行う。内定から漏れた若者についても、会の支援者が増強された時点で再選考の機会があると伝えている。

飯沼さんは「継続的に活動を続けていくためには、5千万円から1億円の資金が必要。会員や寄付者を増やさなければならぬ」と語る。現在の会員数は東北大OBを中心に18人。内訳は年会費が50万円の特別会

生き残った白虎隊の孫ら 被災者に学費、返済求めず

員が4人、5万円の一般会員が14人。ほかに30人から寄付が寄せられ、徐々にではあるが支援の動きは広がりはある。

海の会は資金確保策として、寄付金に対する税額控除の証明書を発行できる「認定NPO法人」を目指している。来年2月にNPO法人化、さらに1年後の認定NPO法人の認可取得を計画。認可されれば、寄付も集まりやすくなる。飯沼さんはみている。

解決方法学ぶ機会に

プロジェクトをスタートさせ、飯沼さんは改めて「高い志を持った若者を見いだすのはなかなか大変」と実感している。応募者の中には、親の援助がどれぐらい可能かなど、家庭の経済状況も分からないまま、支援を求める者もいるという。飯沼さんは「不自由なく過ごしてきた若者たちが震災に遭遇し、困難な状況にどう対応したらよいか戸惑っている様子もつかえる。(困難を乗り越えていく)解決方法を学ぶ絶好の機会にしてほしい」と呼びかけている。問い合わせは海の会ホームページ(<http://www.uminokai.jp>)へ。